

大陸(満州)

戦車隊幹部候補生

愛知県 伊藤 藤 信

今から振り返ると約七〇年程昔のことであろう、父は晩酌をしながら語った。

「お父っあんはなあ、日露戦争に行つてなあ、敵と鉄砲を打つてたんだ。だいぶやられかけたんでコリャたまらんと思つたら、もう前に出られんし、後もさがれんで、まあこれでしまいかと考えて、伏せた頭の鉄かぶとの前に飯盒をおいてジーンとしたりしたら、敵のやつはドンドン撃つてくるし、こっちは撃つにも撃てなんだし、まあこれでおじゃんかと諦めていたら、眼

の前でガチンとやってきた。死んだと思った。目の前がまっくらけ。少したつてから自分の手が見えてきた。飯盒が弾よけだったんだなあ」。

この話を幼いころからよく聞かされたものだった。戦争とは怖いものだと思うがどういふものか知らなかった。ましてやその経緯は知る由もなかった。だが男の子は大きくなつたら兵隊に行つて戦地へゆくものだと教えられた。

やがて時代は移り戦時色が濃くなつた。昭和十六年兵として、区役所から徴兵令書がきた。兵隊検査で甲種合格といわれたときに無性に喜んだものだが、それが現実としてやがてどういふ形になるかわからなかつた。

父と同じように歩兵第六連隊。当時は中部第二部隊

に入隊するものと思っていたが、あにはからんや西部第四十九部隊泰隊入隊と徴兵令書には記入されていた。九州久留米市だ。よりにもよってここまでいって入隊とは、わからぬものである。

昭和十六年十二月八日 月曜日

日本ついに起つ。英米に対し、宣戦布告がなされ、午前十一時宣戦詔勅発される。

ホノルル空襲。マレー半島敵前上陸。シンガポール大爆撃。英戦艦撃沈される。ラジオのニュースはこうしたことesを繰り返して放送した。

日本全土は正午から警戒警報状態に入った。翌九日から市内を歩くにも戦闘帽をかぶるようになった。現役兵として入隊が決まっているものは町内で在郷軍人分会に入会することになっている。

市役所に来るようにいわれて、出掛けてみると、久留米までの旅費が支給された。

昭和十七年一月元旦、午前零時に熱田神宮に初詣で、十日後に入隊となるので、これが最後と思ってお参りました。

一月八日に名古屋を発った。当時は急行に乗っても新幹線と違ってずいぶん時間がかかる。九日の夜は久留米市内の旅館に一泊した。明日は入隊だ。

十日の朝は晴れわたっていた。衛兵の立つ門をくぐって兵舎に入るとすぐに支給された軍服に着替えた。少しナフタリンの臭いがした。やがて昼食。赤飯と紅白の饅頭。

翌十一日は中隊全員（初年兵ばかり）で久留米市内にある高良神社に参拜。そうしてその翌日十二日に入隊式があった。

西部軍司令官 藤江恵輔陸軍中将

西部第四十九部隊（戦車隊）長 川島修陸軍中佐

中隊長 泰 十郎陸軍大尉

それぞれの訓話があった。

この頃から内務班がどういうものかが分かってきた。班長は仲軍曹という。入隊前から噂に聞いていた私的制裁というものはあまり行われていないような気がした。殊に班長は私的制裁の禁止ということを口やかましく唱える主義で内心ホッとしたのであるが、こと軍

紀のこととなると、とてもじゃないが殊更厳しかった。手を挙げることはしなかったが声を大にしてどやしつける方法であった。

入隊後四、五日は人格の問題とか、死に対する覚悟とかが繰り返し繰り返し教育され、殊に内務班長は「努力しろ勉強しろ」と絶えず口にして「典範令」を覚えることをすすめた。こちらはどうせ戦地に行き死ぬつもりでいたから、いままら勉強しても何になるかという気があったが、すすめられるとその気になって、これもご奉公と思っただらやらざるを得まいという気になり、いつのまにやら本気になって、死ぬならそれまでやってやろうと一心になった。今から思うとあの頃は純真であったと同時に内務班長の教育法に一本筋があったのではないかと思われる。後程思ったことだが、教育係の班長とはこうした人物でないと務まらないかも知れない。

一週間後には中隊の教官引率で陸軍墓地に参拝した。その夜下腹部に激痛があった。内務班で戦友よりも早めに就寝した。こんなことで病気になるのは情けない

と思ったが病気には勝てない。翌朝予防接種が行われて、粥食で二十四時間絶対安静。親が聞いたら何と云うか、考えてみると実に情けないことだった。

「名古屋より南の方で暖かいようだが、シベリアの風をモロに受けるので案外この土地は冷たい風が吹く」と班長はかつて言ったことがあった。十日経過して兵隊として給料が渡された。当時で二円三銭。(二円三十銭ではない)。この頃から、内務班での勉強は消灯後はできないので、内務班長の部屋でやったものである。班長はいつも十時過ぎに就寝するらしい。最初のうちは五、六人来ていたが最後まで頑張ったのは私だけだった。

やがて将校室も自習室として提供されるようになった。この内務班からは私一人で、他の五、六人は他所の班であった。どうも聞いてみると幹候受験者ばかり(幹部候補生として目星をつけられた連中)であるらしい。

勉強する内容は各種の典範令と、その日に演習で覚えた記憶の復習で、今日習ったことは明日実行という

わけて、ウロチヨロしておれなかった。胸のポケットに小さな手帳を入れておいて暇があるとすぐ記帳したものである。多忙な毎日によくあれだけ記帳したものだと思う。惜しいかなその手帳はすべてどこかへ行ってしまった。

内務班長と中隊付きの将校から、いつも、一に勉強、二に勉強、三、四を抜いて五に勉強と、勉強づくめで教育された。しかも勉強即実行という日常でこれが私の人生の指針となったのではなかるうか。考えてみると有難いこともある。

一月も末になった頃、戦友と二人で便所の隅で散髪をしたものである。素人なので髪を短くするだけで、互いにギザギザ頭で笑ったものだ。

一人の姉からきた手紙は、ただ励ましの一文であった。当時、肉親から来た手紙は班長に見せることになっていた。班長は「お前は気合が抜けたら、この手紙を何回も読んで奮発するんだぞ」といって自分の額と私の額を交互に封筒で叩いていた。この頃であったと思う。寒い朝点呼の前に内務班の床を縄でこすった。

二月一日、第二次初年兵入隊で、この中隊でも多数が配属になった。

この日の夜であった。班長の指示で内務班で戦友同士のビンタ張り（対抗ビンタ）、これには参った。罪科もない隣の戦友と向かいあって殴りあい、はじめは遠慮がちだがしまいには思いきりブン殴る始末。班長はやめよとはいわなかった。なかにはぶっ倒れるものもいた。男同士の殴りあい、理由も恨みもないのによくやったものだ。平手打ちが拳固に変わりかけた頃、班長は「やめろ！」と怒鳴った。互いに顔は真っ赤となりあざがところどころできていた。

二月も中旬になって、朝の点呼に十番以内に並べないかと思つた。班員は四〇人である。起床ラッパの鳴る前に起きたら古年兵にドヤされる。ラッパで起きて、点呼で並ぶ。この間一、二分とない。上下服を着て、靴下履いて軍帽をかぶり駆けつける。ことは簡単のようだが毎朝一刻を争つたものだ。ある日、四番目に並んだ。これには要領がある。ラッパの鳴る前に靴下とズボンをはくのである。これは寝台の中で寝姿でやる

のだ。

二月四日幹部候補生有資格者第一回筆記試験が行われた。かなり難問だった。もう断念したというものが続々とでてきた。私も自信はなかった。

この頃の演習にはもう戦車操縦。九七式中戦車「しらとり号」が私共十二人に配属された。操縦のかたわら銃剣術の訓練もある。夜は夕食後、点呼までの間に班長からいろいろの学科について説明と教育が行われた。あるとき一人の班員が下を向いていた。おそらく毎日の訓練と教育で疲れがでて眠気がさしたのだろう。班長はそれを見て大いに怒り、気がたるんでいると叱責した。だが手を挙げて叩くことはしなかった。普通なら往復ビンタものである。その代わり下士官室へ引き揚げてしまった。初年兵に考えさせる妙を心得たやり方でもあった。

入隊してからちょうど一カ月になって戦車の操縦訓練があった。学科でこれはこうで、あれはこうするものといった、実物について教育されたが、実際の操縦となると、ことはややこしい。

アクセルのことを噴射^{ふんしゃせんば}践板という。エンジンの音がガタガタするし車内は暗いのでどこにアクセルがあるのか解からない。アレレと迷っているとエンストを起す。そこで「何やってんだ」とゲンコツが飛ぶ。操縦するときマスクをはめてやるのだが、操縦を終わってマスクをとると血糊が付いていた。殴られて口の中を切ったのであろう。毎日が無我夢中である。

こうして十日もすると、全員が戦車操縦を覚えてしまった。右も左も前後も思うまま動かせるようになった。気候は二月で最も寒い時期であった。風邪をひいたり、下痢もして人並みの病気もしたが、緊張していたのか休むこともなくどうにか通りぬけた。

ある夜の点呼後、突然臨時点呼が行われた。隣の中队で逃亡者があったらしい。時は十時半頃であった。

二月も下旬になって幹部候補生試験の第三回目が午後二時から四時まで行われた。この試験の後、少し時間があったので幹部候補生室で新聞を見た。シンガポールは陥落して南方最高指揮官・寺内壽一陸軍大将。マレー方面最高指揮官山下奉文陸軍中將となっていた。

までやろう。あと僅かの期間だ、という考え方になってきた。

四月二十日付で上等兵になった。五月七日十時、下関出帆。玄界灘を夜半渡る。五月八日朝八時、釜山港着。急行列車「のぞみ」に乗る。九時間後午後五時に京城着。五月九日午前九時奉天着、午後一時公主嶺につく。そのまま戦車学校に入る。

最初の印象としてさすが満州だけあって見渡すかぎりの広漠たる大平原に驚く。学校の中にある水道を使っていたがその水の冷たいこと、久留米の比ではなかった。日没は大変遅く、午後八時過ぎてもまだあたりは明るかった。

学校といっても久留米の原隊に輪をかけたくらいのものであらうと思っていたが、翌日からの状況は全く違っていた。戦車学校長は田畑興三郎陸軍少将。学校は第一区隊から第五区隊まであった。一区隊は約四〇人、私は第二区隊、区隊長は中尉であった。入校してから十日くらい経った頃素養試験というのがあった。終日答案用紙に向かってもすぐ書けなかった。全国か

ら集まってきた者がどの程度の教育を受けてきたかを調べるためであろう。

翌日からの訓練で戦車の各部名称は叩きこまれて、エンジン内部をことこまかく説明を受けるが、聞いただけではなかなか覚えきれるものではなく、ましてや電気系統はうるさい。手帳に記入して、その日のことはその日に覚えてしまわないと明日が困る。

夕方になると銃剣術と軍歌演習、夕食後復習、点呼、夜半には不寝番と続く。夜寝ていても休むためではない。日課の一つと考えた方がよいと思った。何かの参考ともなるうが記しておこう

幹部候補生隊 隊歌

一、日露の強者血に染めし 此所満州の一角に

その名も高き公主嶺 学びの園は誓え立つ

二、熱砂鉄焼く夏の日も 氷雪荒む冬の日も

誠の一字を遵奉し 若き腕を鍛うなり

三、一つ喉より発したる 吾等の叫ぶその声は

やがて世界に響きけり ああ偉なるかな幹部隊

四、帝の訓諭畏みて 清き心のものが

進む一路は同仁の

徳を剣の刃に守る

五、低く狂える黄塵に

魂こもれる吾が戦車

その奥深く蹂躞す

勇壮比無き幹候隊

永久に幸あれ 光あれ

この頃は伍長の襟章をつけていた。

部隊の指揮法とか、歴史上の武将の人心掌握法とかの教育が行われた。こうした教育は通り一遍で終わればよいが、後日考査があるから忘れるわけにはいかない。どうしても頭の中に叩き込まねばあとがたたる。

六月も半ばになって九七式車載重機関銃の実弾射撃をやる。戦車砲のことを思うと反動も少なく弾も小振りであるだけに扱い易かった。戦地でもこの調子であればよいと思っていた。六月も終わりにころに閑院宮春仁王殿下が来校、視察と検閲が行われた。

七月半ばには銭家店センカチンに移動。

こうして移動するときには、いつでも夜半に行っていた。このときは馬匹貨車で藁の中で寝た覚えがある。翌日から興安軍の兵舎に入った。兵舎といっても名ばかりで、板囲いで床は荒木のままで隙間がいっぱいあつ

た。夏場はいいが冬になったら兵隊もさぞきつかったろうと思われる。ここでの訓練は厳しいもので、欠水で重装備演習が絶えず繰り返された。

八月下旬に再び公主嶺コウシュンに戻った。銭家店での猛訓練で大変鍛えられてきた。八月下旬のある夜、肌寒い草がした。翌朝原野をみたら昨日まで青々としていた草原が一夜にして黄色くなり萎えていた。急激な気温低下で、いかにも大陸らしかった。一両日のうちに草原は枯野となった。

その頃、鉄条網の破壊訓練があった。こうして戦地ですぐ活用されるあらゆる演習がひっきりなしに行われていた。

九月に入ると作戦要務一・二、戦車操典、工術、射撃、軍隊内務、陸軍刑法、懲罰令、ガス、通信及び陸軍礼法等々が叩き込むように教育された。やがてこれらの結果をテストする時期が来た。戦車隊第七期甲種幹部候補生終末試験がこれである。九月二十九日と三十日、朝から晩まで学科と実科、共にあった。月月火水木金金という言葉が流行したが実際この通りであつ

た。

十月になるとさらに訓練は厳しくなった。体が耐えられるまで鍛えるとはこのことであろう。公主嶺神社までの駆け足行軍があった。ちよつとでも歩いたらドヤされる。駆け足である。なかには倒れる者もあった。が、それに寄りつくわけにはいかない。倒れっぱなしで、あとは隊付きの者が手当をしたであろう。振り向くことができない。もう自分の駆け足で精いっぱいだから。こうした訓練が終わった夜半は必ずといていくらい非常呼集がかかる。

戦地の交代要員はこうして練成された。苦しい鍛錬の毎日を振り返ることもなく十月末日を以て戦車学校の籍は抜けた。いわゆる卒業であった。こうして前線への交代要員は育成された。いつ前線にと命ぜられても覚悟はできていた。それなりに教育もされていたのでなんら苦にすることもなかった。

ただ老いた両親を面倒見る兄弟がなかったことが気がかりだったといえはそれだけである。北支か南方への転出を今にも来るかと待ちかまえていたが、盛岡へ

転属ということになった。「西軍参勤第一〇五六号に依り戦車第二十二連隊に転属を命ず」という記録が残された。

ソ満国境、シベリア抑留で得た

一人は万人のため

万人は一人のため

愛媛県 安井 俊 夫

私は大正十二年一月二十六日、愛媛県旧温泉郡久米村窪田という所で生まれ、長男で、姉一人弟三人の家庭であった。父は役場へ勤めるかたわら農業に従事していた。私は昭和十六年三月、松山商業を卒業すると、三月二十四日には満州の撫順軽金属へ入社した。

当時、頁岩げいがんからアルミニウムをとるということで、鮎川義介社長の満州重工業の傘下にあったこの軽金属会社（世良正一社長）の経理部の出納係をしていた。主に満人の従業員従業員の給料計算である。金は満州国の金